

## 『浄土論註』の思想形態

——親鸞における受容を視点として——

亀 崎 真 量

はじめに

親鸞は法然が唱道した専修念仏の本質を明らかにする主著『教行信証』を撰述するにあたり、曇鸞の『浄土論註』の思想を重要なものとして位置づける。曇鸞の思想は八世紀中頃に日本に伝来し、南都の三論の学系を中心に寓宗的浄土教という位置づけのもと受容されたと指摘される。<sup>(1)</sup>これに対し、念仏往生の法門を頓中の頓とし、浄土宗独立をなそうとした法然は、祖師の第一位に曇鸞を位置づける。その一方で、法然の著作法語等には曇鸞思想の積極的な受容は見られない。そこには、その思想が当面は観察中心と見なされ得ることへ配慮があったと言える。このような状況下で、法然の課題を継承する親鸞は『浄土論註』を思想核に据える。『浄土論註』の思想形態については、龍樹の中観はもとより、僧肇の影響、世親の瑜伽唯識への理解の有無等、先学によって様々な角度から検討がされているが、本論においては親鸞における

受容を視点とし、いくつかの注目すべき点を挙げて『浄土論註』の思想形態を考察する。

### 一 難易二道の決判

法然がそうであるように、親鸞においても『浄土論註』を受容するにあたりまず重要視しているのは劈頭の難易二道の決判である。『浄土論註』の難易二道判は、龍樹の『十住毘婆沙論』を承けるものであるが、注意すべきは決判の表現の違いである。

龍樹の場合、阿毘跋致は諸々の難行を久しく勤行精進することを得られるものであるとし、易行道を求めるとは「怯弱下劣の言なり」と叱責した上で、本願力の易行道を開闡していく。これに対し、曇鸞は「五濁の世無仏の時に阿毘跋致を求むるを難とす」と述べる。一見すると、龍樹は難行に敗壞する自己の怯弱下劣を全責任として易行道を求めると対し、曇鸞は五濁無仏の時世に責任を負わせる形になっている

ように見える。しかし、曇鸞が難の具体的な理由を外道・声聞・無願悪・顛倒・自力に確かめているように、そこには時世に包摂される機根の問題が見定められている。このことは、阿毘跋致を求めることの難しさが、各々の機根の優劣によつて左右されるものではなく、五濁無仏の時世の衆生に通底する問題として捉えられていることを示している。

曇鸞のこの確かめは、北魏における社会情勢の具体的な外的事象を捉えるものであると同時に、当時の仏教信仰に対する内的反省によるものであると指摘される<sup>(2)</sup>。しかし、曇鸞が法蔵菩薩の浄土莊嚴における三界觀見の願心を根拠に「三界は蓋しこれ生死の凡夫流轉の閻宅なり」「三界は皆これ有漏なり、邪道の所生なり」とおさえているように、それは単に目下内外の状況を捕捉反省してのものではなく、本願を視点とする危機感であり自覚である。大乘菩薩道への躓きとそれを超えようとする反省が、時代の限定や個人の内省力ではなく、何時の時代であつても直面する本質的な問題である<sup>(3)</sup>と言われることは、この本願の視点によつて明確な輪郭を得ると言える。その意味において、曇鸞は龍樹の個の自覚を本願によつて白日の下に晒される全人的個の自覚としておさえ、『浄土論』が全人の要請である易行道を開示するものとして確かめていると考えられる。

## 二 莊嚴功德の名号

次に親鸞が注目しているものとして、『浄土論註』の浄土觀が挙げられる。曇鸞は浄土を法性に随順するものであり、法蔵菩薩の大悲發願による修起の清浄土であるとおさえる。ここにおいて重要なことは、その浄土の具体性を「阿弥陀如来の方便莊嚴真実清浄無量の功德の名号」というように名号に確かめている点である。

世親の『浄土論』の場合、五念門という独自の実践形態を瑜伽行の浄土教的説述であると見るならば、それは止觀双運を中心とする円成実性を証得するための修習法であり、浄土は止息(奢摩他)簡択(毘婆舍那)の対象となると指摘される<sup>(4)</sup>。これに対し、『浄土論』を易行道開顯の書とする曇鸞は、「国土の名字仏事をなす」とおさえるところにも示されているように、浄土を功德の名号として衆生に作用し菩薩道を成り立たせるものであるとする。そのため、奢摩他毘婆舍那についても、瑜伽行における止觀とは異なるものになっている。奢摩他は功德によつて悪と二乗を求めることが自然に遮止されること、毘婆舍那は功德によつて往生と見仏を得て清浄の菩薩へと転じることとしており、五念門全体が名号を中心とする行態となっている。

特徴的なのは、莊嚴功德の名号が無明を破る如来の光明で

あり、その名号に依止することにより我法の執見が自然に滅するとおさえられていることである。『浄土論註』における功德については、空性における空用の面を表わすものであると指摘されるが、<sup>(5)</sup>そこで問題になることは、それが実に空義として執見を滅する教法たり得ているか否かである。空義はまた真如の世間の実用と言われるが、曇鸞が「仏の名号をもつて経の体とす」と述べることから、ここでは名号がそれに当たると言える。曇鸞が法蔵菩薩における浄土の修起を「諸波羅蜜を集めて」とおさえるとともに功德を「波羅蜜の声」とし、親鸞がその菩薩行を指して「畢竟浄に入る」と衆生をして「畢竟浄に入らしむる」こととの二重の意味で確かめ、その全体を名号に収斂していることから、莊嚴功德の名号は衆生の執見を寂滅させる空性真如の動態として示されていると考えられる。そのため、曇鸞は名号の称念と如来の光明とを相対的に捉えようとするを不如実修行・名義不相応として否定する。

法然の専修念仏は、『興福寺奏状』によって「念仏の中の麁なり賤なり」と批判される。それは、法然が「仏の本願の行」と述べたことが、諸行の一つとしてしか捉えられなかったことを意味する。したがって、名号それ自体が如来の光明であり浄土の功德の具現であるという曇鸞の視座は、親鸞にとって本願の行の内実を明らかにする重要なものと言える。

### 三 無上菩提心

親鸞が『教行信証』を撰述するにあたって、『興福寺奏状』とともに重大な契機になったと考えられるものに明恵の『摧邪輪』が挙げられる。明恵はこの書において、法然が念仏一行を往生の業とし菩提心を含む諸行は廃捨されるものとしていることについて、「菩提心を撥去する過失」を訴え、人々を欺く邪説であると批判する。そこで、親鸞が注視しているのが『浄土論註』の菩提心観である。

曇鸞は、『浄土論』が五念門によって衆生を撰取し共に往生しようとする作願することを菩薩の巧方便回向と指示することについて、『無量寿経』の三輩生と照合し、「彼の安楽浄土に生まれんと願ずるは、かならず無上菩提心を発するなり」と確かめる。それは、五念門によって浄土を願生することが、大乘菩薩道の方軌を全うするものであることを表わすものである。

明恵の場合、浄土が浄土である所以は無漏浄識を体とするところにあり、法蔵菩薩の「無上正覚の心」がその浄識であり菩提心に他ならないとし、往生を求める行者も同様に菩提心を起さなければならぬと指摘する。『無量寿経』をそのように読むことは可能であり、その視点によれば『浄土論』のみならず『浄土論註』も行者に浄識を求める書と見ること

ができる。そのため、曇鸞の菩提心についての指摘は、『安楽集』からの孫引きという形ではあるが、『摧邪輪』において法然の菩提心廃捨の批判材料として用いられる。

しかし、『浄土論註』において五念門が莊嚴功德の名号を核とするものとして確かめられている限りにおいて、菩提心もその例外では無い。曇鸞は功德によって二乗退転が否定抑止されると確かめているため、ここで言われる菩提心はその抑止力に伴い展開するものであり、「共に」ということも、功德によつて執見が否定され自己閉塞を超えしめられるところに成り立つものであると言える。ここには、難易二道の決判とともに、『観無量寿経』に説かれる下々品の凡夫の往生に傾注し、凡夫に大乘菩薩道が成り立つ思想を『無量寿経』に見出している点が重要な視座としてある。この『無量寿経』観が明恵と決定的に異なる点であり、親鸞が重視しているところである。

そのため、親鸞は「共に仏道に向かえしめたまうなり」という独自の訓を施すことで、曇鸞が言う無上菩提心が行者自力の心ではなく、法蔵菩薩の願心に応動する心であることを明確にしようとする。これによつて、法然の菩提心廃捨が、大乘の放棄などではなく、自力修道心の廃捨であり、本願を根拠とする大乘道の開けを示すものであることを明らかにしている。

## おわりに

『浄土論註』に一貫していることは、自力が依り処にならないという本願を根拠とする自覚と、浄土の功德によつて菩薩たらしめられることへの帰礼である。また、『観無量寿経』の善知識の勸化を受ける下々品に傾注している点も看過できない。したがつて、凡夫の自覚と菩薩道との一致を明らかにすると同時に、名号との値遇と墮二乗の突破において善知識の存在の重要性を示すところに、『浄土論註』の重要な視座があると見える。親鸞が凡夫の自覚のもとに念仏者を同朋と呼びつつ、法然を如来の化身・菩薩と仰ぐことはこれに関わるものである。この二重性が回向に二種の相が確かめられる意義に関連すると考えられる。

- 1 本明義樹「日本浄土教における曇鸞著述の受容と展開」『真宗教学研究』二六（二〇〇五）。
- 2 藤堂恭俊『無量寿経論註の研究』（仏教文化研究所、一九五八）。
- 3 幡谷明『曇鸞教学の研究』（同朋舎、二〇一〇）。
- 4 小谷信千代『世親浄土論の諸問題』（真宗大谷派宗務所出版部、二〇一二）。
- 5 山口益『世親の浄土論』（法蔵館、一九七七）。

〈キーワード〉 曇鸞、難易二道、浄土、名号、菩提心

（大谷大学大学院）